

上杉雅之(監修)

山本綾子・荒木智子(編著)

理学療法士のためのウィメンズ・ヘルス運動療法

評者：藤縄 理

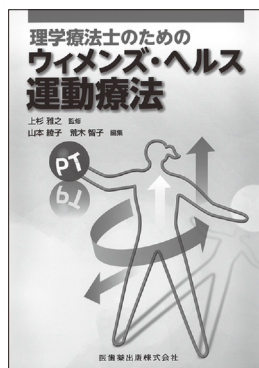
埼玉県立大学保健医療福祉学部理学療法学科

理学療法におけるウィメンズ・ヘルスについて、個人的な経験を述べると、1970年代後半の専門学校しかなかった時代に、すでに産前産後の理学療法が教育されていた。評者は1980年に理学療法士になり、1984年から体系的に徒手理学療法を学び臨床に活かしてきた。1986年以降は、臨床経験を積みながら教育にもかかわってきた。そのなかで、家族や同僚の妊娠中の腰痛や骨盤帯痛、股関節痛などに対処した経験もあった。また、腰背部痛と肩こりおよび頸部痛が強い女性患者さんの理学療法の場面で、治療やセルフエクササイズの指導により、これらの症状の改善に加えて、つらかった生理痛が楽になったと言われたこともあった。1999年に横浜で世界理学療法士連盟(World Confederation for Physical Therapy: WCPT)の学会が開催された際、特別講演で出産後の失禁を含めたさまざまな症状に対する理学療法について、女性の理学療法士が詳細に報告していた。これらの経験から、日本でも理学療法士がウィメンズ・ヘルスの分野にもっと積極的にかわっていく必要があると思い、卒前、卒後教育で折に触れて紹介してきた。

このたび本書が刊行され、それを熟読するにつけ「日本の理学療法士もここまで到達したか」という喜びでいっぱいである。内容は、女性に対する運動療法の必要性、運動療法の基礎知識、病態・症状別の運動療法、ライフイベントに応じた運動指導の実践と多岐にわたっている。そして、それぞれの項目で、基礎理論、病態・症状別の評価と運動療法、徒手療法、セルフエクササイズや生活指導を含めた包括的な理学療法について、図表を多用し、エビデンスも紹介して大変わかりやすく解説してある。分野では、産前産後に加えて、女性特有の病態・疾患として、女性アスリート、女性特有がん、骨盤底機能障害、骨粗鬆症、変形性関節症、育児や復職する女性

にかかわる運動療法や生活指導などが詳述されている。このなかには、骨盤底への直接的アプローチなど、女性の理学療法士でなくてはできないことも数多くある。そして、実践する際に、現時点で保険適用になること、保険外適用でしかできないこと、さらに実際理学療法士がどのように行っているかを紹介している。

日本におけるウィメンズ・ヘルスに対する理学療法士の実践は、まだまだ発展途上という感が強い。本書が多くの理学療法士に読まれ、この分野で活躍する理学療法士が増え、医療や保健事業のなかでの理学療法が広まっていくことを願っている。そうすることで、われわれが専門職として、多くの悩んでいる女性に貢献でき、その結果として理学療法士の認知度と地位が上がると信じている。



B5判・288頁

定価：本体4,800円＋税

医歯薬出版刊、2017年